



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	睡眠時ブラキシズム患者の臨床所見 : 顎関節症患者および睡眠時無呼吸症候群患者との比較 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	木村, 一誠
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第14991号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/85124">https://hdl.handle.net/2115/85124</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Issei_Kimura_review.pdf, 審査の要旨



# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（歯学） 氏名 木村 一 誠

審査担当者 主査 教授 山口 泰彦  
副査 教授 横山 敦郎  
副査 教授 船橋 誠

## 学位論文題名

睡眠時ブラキシズム患者の臨床所見  
-顎関節症患者および睡眠時無呼吸症候群患者との比較-

審査は、審査担当者全員の出席の公聴会において行われた。はじめに申請者より提出論文の概要の説明が行われ、審査担当者が提出論文の内容および関連した学問分野について口頭により試問する形式で行われた。申請者より説明された提出論文の概要は以下の通りである。

睡眠時ブラキシズム（SB）の臨床診断には、歯ぎしり音の指摘、歯の咬耗、ならびに起床時の顎関節や筋肉の異常の各臨床所見の組み合わせからなる SB の臨床診断基準（ICSD3）が設定されている。これらは、SB との関連が疑われている顎関節症（TMD）や、同じ睡眠関連疾患である睡眠時無呼吸症候群（OSAS）の診察項目でもあり、各種所見は個々の診断における交絡因子として働いている可能性もある。SB、TMD、OSAS の関連性については、明確な結論はなく、結論が出ていない背景には、直接的でない、何らかの交絡因子の介在が関係している可能性があると考えられている。本研究は各々の患者群の各種臨床所見を蓄積、比較することにより、SB に特徴的な臨床症状をより明確にすることを目的とした。

対象は SB 診断群 115 人、TMD 診断群 90 人、OSAS 診断群 89 人とした。外来での診察、検査により得られた 14 項目の問診事項（家族からの SB の指摘、歯科医からの SB の指摘、歯ぎしり音の自覚、睡眠時のくいしばりの自覚、起床時の顎のだるさ、起床時の顎の痛み、起床時の歯の痛み、起床時の頭痛、日中の頭痛、日中のくいしばり、昼間の眠気、熟睡感、ストレスの自覚、生活環境の変化）および 3 項目の臨床所見（咬耗、顎関節・咀嚼筋の圧痛、粘膜の歯圧痕）、年齢、性別について調査し、3 群間での比較と SB 診断の有無、歯科医による歯ぎしりの指摘の有無、TMD 診断の有無、OSAS 診断の有無を目的変数とする二項ロジスティック回帰分析を行った。

その結果、SB 診断の有無には、家族からの指摘、歯ぎしり音の自覚、起床時の顎のだるさ、咬耗、性別（女性）が有意な関連性を示した。これらは ICSD3 の項目と合致していたが、関連のオッズ比には大小があり、咬耗の関連性は小さかった。ストレスとの関連性は明確には示されなかった。歯科医による歯ぎしりの指摘の有無には、ICSD3 の項目は有意な関連性を示さなかった。TMD の診断には、起床時の頭痛、熟睡感、顎関節・咀嚼筋の圧痛、性別（女性）、OSAS の有無が有意な関連性を示した。ただし、起床時の頭痛、熟睡感、OSAS の有無はマイナス要因であった。OSAS の診断には、歯科医からの SB の指摘、起床時の顎のだるさ、起床時の顎の痛み、日中のくいしばり、昼間の眠気、ストレスの自覚、顎関節・咀嚼筋の圧痛、年齢、性別（男性）が有意な関連性を示した。ただし、歯科医からの指摘、起床時の顎のだるさ、起床時の顎の痛み、日中のくいしばり、ストレスの自覚、顎関節・咀嚼筋の圧痛はマイナスの要因であった。3 群間でのロジスティック回帰分析の結果では各々の診断に共通で関連性を示したのは、SB と TMD の性別（女性）のみであった。さらに、SB と TMD における女性の割合の間には有意差があり、共通性が高い臨床所見とは言えなかった。そのため、SB の診断については、TMD や OSAS の診断とは独立して取り扱うのが妥当と考えられた。

審査担当者からの主な質問は以下のとおりであった。

- 1) 研究データと比較した臨床における実感について
- 2) 調査項目を統計的に解析した意義について
- 3) SB と TMD の関連について
- 4) SB と OSAS の関連について
- 5) TMD と OSAS の関連について
- 6) 咬耗の評価方法について
- 7) 歯科医からの SB の指摘の内容について
- 8) 歯科医からの SB の指摘を調査した意義について
- 9) ストレスの自覚の内容について
- 10) ストレスの評価方法について
- 11) OSAS とストレスとの関連について
- 12) 対象者における OSAS の重症度について

これらの質問に対する申請者の回答および説明は、専門的知識に基づいた的確なものであった。また、今後の課題と研究の将来展望も示された。

試問により申請者が関連学問領域における十分な知識を有していると判断された。本学位論文の研究内容は新規性を有し、得られた知見は今後の睡眠時ブラキシズムの研究や治療法の発展へつながるものと評価できた。以上のことから、審査員一同は申請者が博士（歯学）の学位を授与されるに相応しいと判定した。